

グラチア音楽賞 授賞式・記念コンサート



第9回グラチア音楽賞の授賞式・記念コンサート(3面に関連記事)



CONTENTS

- P3** 清水やそしさんご遺族より絵画寄贈
- P4-5** インタビュー企画 この人に聞く
- P6** 能登半島地震の被災者支援
- P7** カレッジ生 石井十次について学ぶ

# 旭川荘 だより

vol.  
**278**

2024.3.15 発行

発行/社会福祉法人 旭川荘  
〒703-8555 岡山市北区祇園866  
TEL 086-275-0131 FAX 086-275-5640  
<https://www.asahigawasou.or.jp>



吉備ワークホームで行われた「職場安全祈願祭」  
(2面に関連記事)



## 社会福祉法人としての「夢」と「経営」

副理事長 新井禎彦

神崎理事長新体制発足後に、私達はずっと収支状況を語り、会社のように経営のことばかり言い連ねてと感じている方もいらっしゃると思います。「昔の旭川荘は理想を求めて、お金のことはこだわらなかった。どうなっているのか？」という声も耳にします。

かつて日本は国として豊かになっていく時代があり、福祉を充実して誰もが幸福に過ごせる社会を作ることが政策の中心におかれていました。法人は理想と夢を追いかけて、普通に運営をしていれば経営は十二分に成りたつ時代だったと思います。現在はコロナ禍の厳しい影響もようやく落ち着き、法人の経営状態は順調に改善し、この機会に将来像を描くことができる状況に好転しています。

今、日本は人口減少と経済の縮小局面にあるのが現実です。社会保障負担の大きさから、今後の人口減少

と比例して医療、福祉、介護すべての分野で施設が過剰となり淘汰、選択されていく時代を迎えます。この厳しい時代の中でも、私たちは夢や理想を持ちつづけ、それを実現する強い志が必要です。利用者と家族の皆様の幸福を達成すること。それに必要な新しい時代の医療、福祉、介護の実践を生み出し、社会に提案することが私たちの夢と理想です。

この夢を追い求め理想を実現しようとしても、財政的な強さが無ければ、絵空事を唱えて地に足が全くついていない姿をさらすこととなります。コロナ禍を乗り越えたこの機会に、まず夢と理想を追いかけられる力強い財務状況を整えていきます。その上で神崎理事長も私も遥か先に思える夢も理想もしっかりと見据えています。「夢」の実現への第一歩が「経営」である道を歩き始めたところだにご理解いただき、ともに歩んでまいりましょう。

## 吉備ワークホーム 祈願祭

吉備ワークホームで1月10日、春日神社(岡山市北区七日市西町)の神職による「職場安全祈願祭」が行われ、利用者と職員が今年1年の健康と無事故を祈りました。

同祈願祭は、吉備ワークホームが春日神社のしめ縄や玉串などに使用される紙片「紙垂」を製作しているご縁で、2017年から始まりました。コロナ感染症の影響で中止した2021年を除き、毎年行われています。

施設内の食堂にはお供え物や神具が置かれた祭壇が設けられ、利用者と職員約40人が参加。春日神社禰

宜の小笹和也さんが厳かな雰囲気の中、祝詞をあげお祓いを行うなどしました。続いて三宅律子所長が神前に玉串を捧げ、利用者を代表して“年男”の小川彰さんが続きました。

神事後、小笹さんが祭壇に飾られた御幣や穢れを祓う大麻などの祭具について紹介し、「吉備ワークホームの皆さんの丁寧な仕事を頼りに、今年も神事を行います」と話すと、参加者は真剣に耳を傾けていました。



玉串を捧げる年男の小川さん



吉備ワークホームが作ったトートバッグをお礼にプレゼント

## 清水やそしさんの絵画3点寄贈 遺族より旭川荘へ ギャラリーにもコーナー



旭川学園の玄関に飾られている「キング オブ ザリング」

昨年6月に亡くなった旭川荘アートギャラリー名誉館長の清水やそしさんのご遺族より旭川荘へ、昨年末までに清水さん作の油絵3点をご寄贈いただきました。自由の女神像を描いた「キング オブ ザリング」(サイズ30号)

は旭川学園、女性の姿を描いた「無題」(同)はカレッジ旭川荘にそれぞれ飾られ、4号サイズの「ハトの居場所」は旭川荘アートギャラリーに展示しています。

清水さんは荘内の身体障害者療護施設へ入所されていた時にも絵画の制作活動に取り組み、県展のほか外部の展示会に作品を出展。退所後は荘内の障害児者や高齢者の施設で絵画活動の講師を務められました。自由な描画を大切にされた清水さんの絵画教室では、参加した皆さんが生き生きと制作活動に取り組みました。また、旭川学園では毎年絵画クラブの講師としてカレン

ダー作成に携わってこられ、表紙には清水さんが選んだ自身の絵を掲載し、コロナ前まではカレンダーに使用する利用者の絵も選定されていました。今年は「清水やそし先生画集」として表紙の寄贈作品のほか、歴代表紙を飾ってきた清水さんの絵12点をカレンダーに掲載。最後のページには花束の絵と“Thank you”のメッセージを入れ、清水さんへのこれまでの感謝の気持ちを表しました。

アートギャラリーでは清水さんの開館当初から名誉館長としてアートギャラリー展の入賞作品の選考に携わっていただきました。また2013年に皇太子時代の天皇陛下が旭川荘にお見えになった際には、利用者の作品の解説をしていただきました。清水さんの長年の旭川荘への貢献に感謝し、12月からギャラリー内に清水さんのコーナーを設け、寄贈された絵画や旭川学園のカレンダーなどを展示しています。

(旭川荘アートギャラリー)



「無題」。清水さんの略歴も紹介 = カレッジ旭川荘



清水さんのコーナー = アートギャラリー

## グラチア音楽賞に中村翔太郎さんと松崎国生さん 佐野隆哉さんによる共楽コンサート開催も

第9回グラチア音楽賞の授賞式、受賞記念コンサート(主催:旭川荘・グラチア・アート・プロジェクト★)が2月27日、旭川荘厚生専門学院で開催され、ヴィオラ奏者の中村翔太郎さんと作曲家の松崎国生さんにグラチア音楽賞が贈られました。来賓を迎えての開催は4年ぶり。旭川荘の利用者や職員、厚生専門学院の学生ら約150人が参加しました。

授賞式では、神崎晋理事長から受賞者2人に賞状が手渡され、グラチア・アート・プロジェクト代表の瀧井敬子さん(元 東京藝術大学特任教授)から副賞が贈られました。

続いて行われた受賞記念コンサートでは、松崎さんが中村さんのお子さんの名前を音列に変換するなどして作曲し、名前を曲名につけた「無伴奏ヴィオラ・ソナタ 第1番 “Rinka”」が中村さんの演奏で披露されました。また中村さんはシューマンの「おとぎの絵本 作品113」などをピアニストの佐野隆哉さん(第3回グラチア音楽賞受賞)の伴奏に合わせて演奏。情感豊かで艶のあるヴィオラの音色が会場に響きました。

翌28日には旭川荘療育・医療センターで第4回共楽

コンサートがあり、佐野さんによるピアノ演奏が行われました。演奏の合間には厚生専門学院の学生代表が佐野さんと一緒に連弾し、間近でプロの迫力のある演奏に触れました。

★グラチア・アート・プロジェクトについては旭川荘だより271号2面をご参照ください。



グラチア音楽賞を受賞した松崎さん(左)と中村さん(右)

# この人に聞く

第2回

ひらた旭川荘 総括施設長  
たなか しげゆき  
田中 重行さん

ひらたえがお保育園 園長  
こうぐち いくえ  
河口 郁絵さん

ひらた支部事務局 総務主任  
やぶた よしこ  
藪田 善子さん

旭川荘で働いている職員へのインタビュー企画「この人に聞く」。第2回は、2003(平成15)年に岡山県より運営委託されて20年を迎えた「ひらた旭川荘」をよく知る3人の職員に、委託当時の思い出や、特に力を入れる地域との交流について、座談会形式で語ってもらいました。

聞き手／尾上俊太郎(旭川荘真庭地域センター)

## Q 2003年の委託当時を振り返り、印象深い出来事などがありますか？

**田中:**委託直前の2003年3月初旬、現在のひらた旭川荘(以下ひらた)である岡山県立総合社会福祉センターの相談棟に、4月からひらたに異動する旭川荘職員約50人が集められ、ひと足早く内示を受けた。3月中は異動先の施設で県の職員から引き継ぎや研修を受け、準備をした。県職員のうち19人(1施設当たり4~5人)は出向で引き続き施設に残ったが、大半は3月31日をもって異動していったため、4月1日はガラリと雰囲気が変わったことが印象に残っている。

**河口:**旭川学園とわかさ学園は、同じ児童入所施設でありながら、利用児童の特性や支援内容の違いに戸惑ったが、県立当時からの丁寧なケースワークや学卒後を見据えた支援方針など県職員と一緒に働くことで多くのことを学べた。

**藪田:**2003年に入社し、大学で学んできた児童分野ではなく、成人施設のかえで寮に配属だったため、いろいろ戸惑ったがすべてが新鮮で楽しかった。新採用職員約20人がひらたに配属となり、かえで寮は私を含め4人。若い職員が大勢いたが、当時いた職員の大半はひらた以外の施設へ異動した。

**田中:**3年間で引き継ぎを終え、2006年に運営委託から指

定管理に変わった。2009年には旭川荘に移譲され「県立おかやま福祉の郷」から「ひらた旭川荘」に名称変更した。

## Q ひらた旭川荘ならではの文化や風土があるように感じます。

**河口:**施設同士の横のつながりが強く、コロナ前は敷地内の広場やグラウンドで夏祭りや秋祭り、運動会を合同開催していた。運動会は利用者が高齢化してやめたが、夏と秋の祭りはコロナ禍を経て徐々に復活している。何かあった時には施設の枠を超え、みんなで集まって対応するのがひらたの文化。それが今の地域貢献活動につながっている。

## Q ひらたの地域貢献活動とは？

**田中:**2014年にひらたの将来と地域貢献を考える「ひらた旭川荘将来像検討会」を立ち上げ、地域に向けひらたの印象を問うアンケート調査を実施した。結果は「入りにくい」「何をしているのか知らない」「怖い」等のネガティブな回答ばかり。イメージをプラスに変えるため、毎月開催する「ひらたの市」を通じて地域の人を迎え入れ、公民館の「出前講座」で旭川荘が蓄積してきたノウハウを地域に還元しようと考えた。

**河口:**こうした試みを通じて地域のお世話をされている人たち(民生委員、愛育委員、町内会長等)とコンタクトを取るようになり、何でも相談できる関係ができていった。現在は各施設の代表者約20人が「地域貢献委員会」として集まり、知恵を出し活動している。地域貢献は①ひらたの市②福祉教育Ⅰ(対象は御南中学校生徒)③福祉教育Ⅱ(対象は西小学校・御南小学校児童)一の3本柱で展開。福祉教育は職員が各学校の教員と相談しながら障害や福祉について学んでもらう機会を作り、今年度は、小学生はポッチャ、中学生は車いすと視覚障害者体験をしてもらった。また、学校側から生徒が書



つどいのはばフォレストで行われた座談会

いた感想文の提供を受け、ひらたの市で掲示し、地域貢献委員会の活動に対し、中学生がどのように感じたのかを来場者に公開している。

## Q ボランティアなど地域の方との かかわりは？

**河口：**ボランティアサークル「かけはし」は県の時代から週に1回、環境整備や交流活動を行ってくださっている。民生委員、中電工は環境整備、理容組合はかえで寮へ散髪に来てくださるなど、それぞれ定期的にボランティアとして協力いただいている。

**田中：**(座談会をしている)この場所「つどいのばフォレスト」は岡山市内の篤志家のご寄付により2020年に改装した。コロナ禍の後、フリースペースとして格安で貸し出したところ、地域の人たちがひらたの市の日以外にも入って来るようになった。

**藪田：**施設の人たちが音楽活動等で使用したり、地域の人たちが認知症カフェを開催したり。ひらたの市の出店者が集まって、フリマなどのイベントを開催することもある。今はそうした地域の利用は月に4、5日くらいだが、これから徐々に増えていくと思う。

## Q 今後の展望、課題などは？

**田中：**地域貢献の4本目の柱として、地域の健康づくりに協力できないかと考えている。地元でウォーキングの会を企画していた人たちが高齢になったが、後を継ぐ人がおらず続けられなくなったのがきっかけ。ひらたで引き継ぎ、年に2回ぐらい住民向けに開催できればと思う。地域と同様にひらたの中でも、いろんな行事にかかわる職員の世代交代ができていない。かつて、立ち上げた「将来像検討会」ではこの地域で我々が担うべき役割を考えようとメンバーを公募した。いまだに同じような人たちがやっているの、それを解消したい。

**河口：**現場の職員は忙しいとなかなか抜けられない…。結局、参加するのは課長以上など、そういう人たちになる。昔は大きな行事などに積極的に若い職員を出して、経験を積ませていた。職員育成という視点が薄れてきているような気がする。

**藪田：**ここ2、3年で地域貢献にかかわった職員の中には「やってみたら楽しかった」という人もいる。できるだけ多くの職員に経験してもらい、みんなで盛り上げていきたい。



田中重行さん  
1979(昭和54)年入職。いづみ寮、旭川学園を経て2003年に県立おかやま福祉の郷(現ひらた旭川荘)のわかさ学園へ。2006年いんべ通園センターに異動となるが、2012年にひらた旭川荘わかば寮に戻り、2015年より現職を勤務しながら、2021年よりひらたえがお保育園。2023年より現職に専従。



河口郁絵さん  
1989(平成元)年入職。旭川学園で勤務した後、2003年にわかさ学園へ。2012年からわかさ学園が児童通所事業として開始したわかさ学園いちごを兼務。2023年より現職。



藪田善子さん  
2003(平成15)年入職し、かえで寮に配属。結婚出産を機に2009年から庶務課に勤務。

## 取材 こぼれ話

取材の最後に、3人が互いにとってどんな存在であるのか聞きました。田中さんは2人にとって「気軽に相談に乗ってくれる頼れる存在」で「尊敬できる人」とのこと。河口さんには2人から「対等に話ができる戦友」「信頼」という言葉が上がり、藪田さんは「組織の中の緩衝材的な存在」「ひらたの市を大きくした努力家」とのことでした。

座談会はワイワイ、キャッキョと話が途切れることなく、2時間近く<sup>さるどし</sup>に及びました。聞けば、みんな申年生まれとのこと。立場も年齢も違う3人が、そのギャップを感じさせることなく信頼し話し合える。そのような職員の関係性が、ひらた旭川荘と地域の垣根のない関係づくりに大きく影響しているのだと感じました。

## 能登半島地震 避難所で被災者支援 竜ノ口寮介護主任 小野智香子さん

能登半島地震の被災者支援のため、厚生労働省からの応援要請を受け、竜ノ口寮の小野智香子さんが2月13日から17日まで、金沢市の避難所へ派遣されました。現地での活動について小野さんに語っていただきました。



避難所での活動を振り返る小野さん

派遣されたのは、石川県が設置する1.5次避難所★の一つである産業展示館2号館。館内には2人用テントが並べられ、約60人が身を寄せていた。平均年齢は69歳だが、幼い子ども連れの家族や、80、90代の夫婦も。近くの避難所には要介護度の高い人たちがいたが、展示館

は自立生活ができる人や家族の介助がある人。輪島、珠洲市からの避難が多く、サービスが必要だと思われても介護認定を受けていないケースが目立った。

活動は20時から翌朝8時までの夜勤を4回。他県から派遣された介護職4～6人で担当する。歩行状態を見てトイレの付き添い、着衣を整えるなどの支援を行うが、大半が自立されている人。夜間だったこともあり、介助より見守りが中心だった。

県外から帰省してきて被災、全員家の下敷きになり大人は助かったが子どもを亡くされた家族がいて、憔悴した母親が一人で両親の世話をされていた。私たちが代わり、休んでもらいたかったが、「自分でするので大丈夫」と断られたとの情報もあり、掛ける言葉が見つからなかった。何もできない自分の無力さを痛感した。

介護職として何か手伝いたい気持ちと、避難所の現状には“温度差”があった。支援を望まない高齢女性に声を掛け、怒鳴られて落ち込むスタッフも。私もその女性から怒りをぶつけられた。「何度言ったら分かる！自分でできるって言ってるやろ！」と。「24時間監視されて…」とも。人目のある避難生活。帰れる場所がなく、次にどこへ行けるか分からない。多くの人がストレスを抱えていた。

被災者の中には温かい言葉をかけてくださる人もいた。最初に足のケアを担当した70代男性。帰り際に別れの挨拶をすると「あなたに会えて元気をもらったわ」と。大いに励みになった。

施設で仕事をしていると進んで介助に動くことに慣れてしまっていたが、相手が望んでいることを見極め、待つことも必要だということを経験で学んだ。今後の支援に役立てていきたい。

★1.5次避難所 ホテルなどの2次避難先に入るまで、一時的に被災者を受け入れる施設

## 山陽新聞社会事業団から額縁寄贈



額縁を贈った江草専務理事(左端)と神崎理事長(中央)ら

山陽新聞社会事業団から12月21日、小型額縁を20点いただきました。

額縁は、額縁製造や絵画などを扱う「アートラック」(岡山市北区横井上)が製作し、障害者のアート活動を支援しようと同事業団へ寄贈したもの。製造過程で出る端材を利用して作られていて、1辺の長さは10～20センチ。

深緑やベージュなどの地色に模様を施してあります。

資料館で贈呈式が行われ、額縁が同事業団の江草明彦専務理事より神崎晋理事長へ手渡されました。江草専務理事は「旭川荘のアート活動に有効に活用してください」と話し、神崎理事長は「大切に使用させていただきます」とお礼を述べました。

いただいた額縁は、利用者の絵や造形などのアート作品を展示している旭川荘アートギャラリーの活動で使用されます。



上品な色使いの額縁。はがきや色紙サイズの作品展示に利用される

## 石井十次の偉業について学ぼう カレッジ生が資料室など見学

カレッジ旭川荘で学ぶ若者たちが12月11日、岡山市東区下阿知の旧大宮幼稚園園舎に11月にオープンした「石井十次資料室」を訪れ、明治期に日本初の孤児施設・岡山孤児院を創設した十次の偉業について理解を深めました。

新聞報道で資料室のことを知った末光茂名誉理事長が、資料室を整備した地元有志らでつくる「石井十次に学ぶ会」(東森貞会長)に研修の受け入れを依頼。カレッジ側も十次の生涯を描いた映画などで事前学習した上で臨みました。

研修にはカレッジの1～4年生と職員合わせ約50人が参加。学ぶ会のメンバーが紙芝居の上演や講義を行い、岡山県医学校の学生だった十次が資料室から近い上阿知の診療所で代診をしていた時に、巡礼の母親から男児を預かったことをきっかけに孤児教育に目覚めていったこと、その経緯から上阿知が岡山孤児院発祥の地とされ、学ぶ会が十次の教えを伝える顕彰活動を行っていることを紹介しました。

カレッジ生たちは時折メモを取りながら熱心に聴講。最後に代表のカレッジ生が学ぶ会へのお礼とともに「研修を通して(十次が)人はどうあるべきかを教えてくれたように思う。児童福祉の先駆者である十次先生のご精神



十次の愛の実践について講義を聴くカレッジ生

を大切に、頑張っていきたい」と決意を述べました。

カレッジ生たちは講義の合間に、十次の肖像写真や家族写真などが並ぶ資料室を見学。さらに、学ぶ会メンバーの案内で、十次が巡礼の母子と出会った「大師堂」や「岡山孤児院発祥の地碑」にも足を運びました。



資料室から少し離れた「岡山孤児院発祥の地碑」も訪れた

## リレーコラム

### 松花堂弁当の給食

弁当箱の蓋を開ける時のワクワク感、彩り鮮やかな食材、区切られたスペースに一品一品が整って盛り付けされ、どれから食べるか迷ってしまう…

今回は鬼北町立北宇和病院で月に1回提供している松花堂弁当の給食をご紹介します。

病院食というと、一般的に味が薄く量が少ない、あまりおいしくない、といった意見がよく聞かれます。治療のための栄養管理を目的としているため、普段の食事より調味料を控えていたり、彩りがいまひとつだったりといったこともあるでしょう。

とはいえ制限の多い入院生活の中で食事は楽しみの一つです。平成30年、外部委託していた給食を院内で調理するようになったタイミングでスタッフから出たアイデアが松花堂弁当の給食。少しずつ工夫を加えながら、月に1回のお楽しみとして定着しています。

松花堂弁当とは十字に区切られた弁当箱に見栄え良く料理を盛り付けてあるもので、懐石料理(茶懐石)の流れを汲んでいるため、旬の食材を使い、彩り鮮やかに、一品

一品におもてなしの想いが詰まっています。普段は管理栄養士が献立を考えますが、このときは調理師が献立を担当して管理栄養士が栄養バランスを整えます。

手間暇をかけて作る松花堂弁当、患者さんにも好評です。  
(広報委員 佐竹勇樹)



松岡由依調理師(左)と大内美温管理栄養士

#### ★ 1月23日の松花堂弁当メニュー ★

- ・ごはん(生姜の佃煮)
- ・豆腐のおとし揚げ
- ・鶏肉の西京漬け焼き
- ・さつまいもの茶巾絞り
- ・(摂食機能障害の患者さんが多いため、小さくカットした肉を使用)
- ・白菜巻き(しそ風味)
- ・季節のフルーツ
- ・和風蒸しケーキ

## 岡山南ロータリークラブより 桜の植樹

岡山南ロータリークラブの皆さんによる桜の植樹が2月13日に行われました。同クラブによる桜の植樹は1997年に始まり27回目。今回ソメイヨシノ2本が加わり、植樹本数は合計111本になります。



桜の幼木に土をかける延原会長(左)と神崎理事長(右)ら

川崎祐宣記念総合在宅支援センターであった植樹式には、同クラブの会員や旭川荘の関係者ら約50人が出席しました。同クラブの延原正浩会長が「長年続いている支援で感慨深い。今後も先人の思いを引き継ぎ植樹を続けていきたい」とあいさつ。神崎晋理事長は「毎年桜を植樹していただき感謝します。3月の終わりには綺麗な花を咲かせ、利用者や職員、学生らの癒しになります」とお礼を述べました。

その後、参加者は交代でスコップを持ち、支柱に固定された桜の幼木の根元に土をかけていきました。

## ふくのいち 招き猫美術館で開催 新作グッズ、ねこパンも好評

旭川荘の利用者が製作したねこグッズなどを販売する「辰年新春 旭川荘ふくのいちぎおんの杜のニャンといもの」が1月5日から29日まで、招き猫美術館（岡山市北区金山寺）で開催されました。



可愛いねこグッズが並んだ「旭川荘ふくのいち」

今年で6回目を迎える新春恒例のイベントで、吉備ワークホーム、あおば、竜ノ口寮、せとうち旭川荘、いんべ通園センター、真庭地域センターの6施設が参加。ねこの姿や顔、肉球などをモチーフにしたアクセサリーや小物、辰年の干支の置物など合わせて約300点を並べました。

定番商品に加え、利用者が模様を描いたプラバンをねこの顔の形にカットしたイヤリングやヘアゴム、手織りのコースターなどの新商品もあり、来館者の人気を集めました。



このほか2月22日の「猫の日」に合わせて同美術館で行われたイベントで、松山ワークセンターが製造した「ねこパン」を販売しました。メロンパンに耳に見立てた三角形のクッキーを付け、ココアでねこ顔を描いたもので、50個限定販売。同美術館がSNSなどで告知したこともあり、販売開始後、即完売しました。



好評だった「ねこパン」

## ひらた旭川荘 CFで目標額達成 樹木剪定等に420万円超の支援

昨年12月20日にスタートしたひらた旭川荘のクラウドファンディング（CF）「みんなが安全・安心で楽しく集える『ひらたの杜』を創りたい！」プロジェクト（※旭川荘だより277号参照）は、1月31日をもって終了。支援の総額は目標の300万円を大幅に上回る4,246,793円となりました。

CFサイトから支援してくださった方、ひらた旭川荘に直接寄付金を寄せてくださった方を含め支援者は255人・団体。多くの皆さまより温かいご支援を頂戴したほか、SNSなどで多くの拡散・シェア、お知り合いへのご紹介・お声かけなど、ご尽力をいただきましたことについて深く感謝申し上げます。

頂戴したご支援は「ひらたの杜」の木々の保全・環境整備等、有効に使わせていただき、プロジェクトを遂行してまいります。本当にありがとうございました。

（ひらたの杜保全プロジェクトチーム）



プロジェクト成立を知らせるCFサイトの画面  
（表示の支援者数は実際とは異なります）



### 編集後記

能登半島地震で被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

Not 忘災 but 防災！（過去の経験を教訓に）

編集後記にして唐突ですが、これは阪神・淡路大震災から持ち続けている私なりの防災標語です。

未だ先の見えない復興までの道のり。未だ見ぬ災害に対してできることは何なのか。災害の記憶を風化させないことも防災だと感じています。

（広報委員 藤井 出）